

地球温暖化対策を念頭においた 森林づくりを考える

松本光朗

独立行政法人森林総合研究所 温暖化対応推進室長

**研究を志すきっかけは
気にかけていた環境問題**

森林に興味をもったのは父親の影響です。都会育ちでしたが、父親が山好きでよくスキーやキャンプに連れて行ってくれました。その影響からか、高校一年生のときには自転車で、愛知県から岐阜県を抜け、能登をまわり、琵琶湖経由で帰るといった旅をしました。大学に入ってもテントを積んで自転車やジープで北海道

を一周したりと、気がつけば自然に向かって走るようになっていました。

そんな背景があることから、大学では自然に林学科に入りました。興味があったのは林業よりも当時から注目されていた環境問題です。学びながら、自然が失われていたと思っていた日本が、実は森林が豊かだということを知り、その素晴らしさを再認識しました。私は大学を卒業すると大学院には行かず林業試験場（現森林総合研究所）に入りました。

松本光朗（まつもと みつお）

名古屋大学卒業、農学博士。第四次評価報告書をはじめ IPCC 報告書の代表執筆者を歴任。森林計画学賞受賞。共著に森林の百科（岩波書店）、林業技術ハンドブック（全国林業改良普及協会）などがある。



なので、研究という仕事に戸惑いもありましたが、研究の実践の場での身についたこともたくさんありました。

**世界でもまねな森林情報を
うまく活用することが重要**

もともと私が取り組んでいた研究は地球温暖化対策ではなく、地図データを含めた森林情報を用いていかに森林資源を把握するか、というものです。森林の二酸化炭素吸収量を割り出すには、このような森林の

情報が必要になるので、私に地球温暖化対策の仕事が回ってきたわけです。我が国には森林簿と森林計画図という、世界でもまねな詳細な情報があり、これをいかにうまく管理し利用するかが重要です。

林野庁からの委託事業により、すでに日本の吸収量を正確に算定する方法の開発は終わりました。また、全国の森林情報を統合した国家森林資源データベースを開発し、これにより京都議定書報告のための吸



平成 18 年に中国・北京で開かれた IPCC 執筆者会議にも出席

収量が算出されました。その次のス
テップとして、今とだけ吸収して
いるかだけではなく、将来どうなる
のかを予測シミュレーションできる
システムの開発にも着手しています。
二〇五〇年までに森林や、それによ
る吸収量がどう変わるか、気候変動
による森林がどう反応するかといっ
たことをシミュレートできるシステ

ムです。

もちろん、研究をしていれば楽
しいことも苦労することもありま
す。私にとって青天の霹靂だったの
は、世界のトップ研究者が集う I P
C C（気候変動に関する政府間パネ
ル）の執筆者として選ばれたこと
です。それまで雲の上のような存在と
思っていた世界の最先端の研究者グ
ループに加わり、温暖化に
係わる議論や執筆を進める
ことになりました。京都議
定書報告のための算定・報
告手法については、基本的
なルールはできていたもの
の、実務の詳細なこと
までは詰まっています
した。その手法作りに参
画し、私のアイデアが報告書
の重要なポイントのひとつ
となりました。この経験は
貴重なものでした。また、
昨年度出版された、I P C
C 第 4 次報告書は、これま
で一番難しい仕事でした。
今も日の丸を背負った形で
国際的な会議に参加してい
ますが、やり甲斐がある仕
事の反面、多忙のため大好

きなスキューバダイビングにいけな
くなってしまったことだけが残念です。

地球温暖化対策における 森林の重要性

今後の温暖化対策を考えた森林管
理のあり方について考えるとき、一
般に木を伐ることは悪いことだとい
う風潮がまだ残っています。間伐
を行い、間伐材や木材を利用するこ
とにより、森林吸収もさることなが
ら化石燃料代替により排出削減とな
るといふ事実をもっと知って
もらう必要があると思います。

また世界的に見ると今回の
C O P でも取り上げられた途
上国の森林減少という問題が
あります。大規模な森林の転
用や焼畑などで樹木が伐採さ
れ、そこに貯められていた二
酸化炭素が大気に戻って行っ
ています。世界中の二酸化炭
素の八割は化石燃料から出
されますが、残りの二割は途
上国の森林減少が原因となっ
ているのです。それを食い止
めることは温暖化防止に大き
な意味があります。もつとも、
それらの国は国策として伐採

や開発を行っているため、森林減少
の問題に対処するには、その国の経
済事情や政策、国際議論も関連して
きます。技術屋の私たちだけではど
うにもできない部分もあって、もど
かしさを感じることもあります。世
界のさまざまな機関と力をあわせな
がら手立てを探っていくことが今後
の大きな課題でしょう。森林が持つ
さまざまな機能を利用し、守りなが
ら地域も世界も幸せになる未来を目
指していきたいと思っています。



間伐された針葉樹林